

CATCH the NEW!

大切なひとと過ごす秋の夜長、
こんな愛がいっぱいのコンサートはいかが？



鈴木哲彦



片桐麻美

例を見ない暑さ激しかった夏が過ぎ、そろそろ秋の気配がするこの京都。恋人達にとっては、これからが恋の本番の季節かもしれない。さて、そんなカップルにおススメしたいイベントがこれだ。テーマは「恋愛」。ただ今人気急上昇中のアーティスト達を集めて、歌と語りで恋人達の夜に色を添える。出演アーティストとしては、極上のラヴソングを生み出すシンガー・ソング・ライター、福岡益、鈴木哲彦、片桐麻美、MIYUKI。この注目度高い4組をゲストに迎え、また近未来的パフォーマンスで除々にその存在感が認知されつつある2人組パフォーマンス明和電機もフィーチャーする。何が飛び出すかわからない、でも一番大切な誰かと訪れればハートがあなたかくなることうけあいのこの夜に、抽選で200組400名をご招待する。

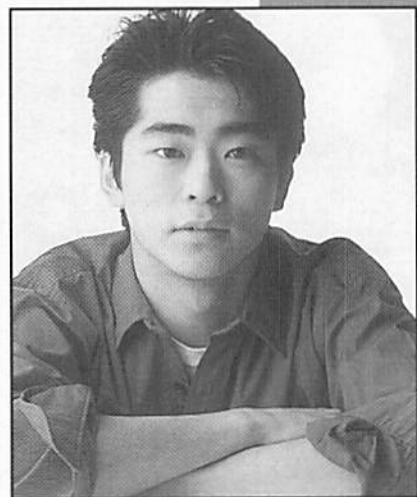
秋の京都〜恋人達のために贈る夜 その1。

●SOUND ART '94●

- 〈日程〉11月11日(金)
- 〈時間〉開場18:00 開演18:30
- 〈場所〉金剛能楽堂
京都市中京区室町通四条上ル
- 〈応募定員〉200組400名
- 〈主催〉平安建都1200年協会
- 〈後援〉αステーション
クラブフェイム
- 〈申込み方法〉
官製ハガキに住所・氏名・年齢・職業・電話番号を明記して下記まで
- 〈応募先〉〒604 京都市中京区烏丸通押小路北西
- 平安建都1200年記念協会内
「SOUND ART '94〜恋人達のために贈る夜〜その1」係
- 〈問合せ〉075・212・0808
- 〈締切り〉10月11日(火) 当日消印有効



MIYUKI



福岡益

SOUND ART '94

モーフィーン来日。

どんな音楽とも説明できない。そしてどんなバンドとも似ていない。それが、このモーフィーンを初めて耳にした者が抱く感想らしい。マーク・サンドマン率いるボストン出身の彼ら3人組は、2弦スライドベース、バリトンサクソ、そしてドラムスというユニークな構成のギターレス・バンドである。結成3年、デビュー作「グッド」は92年のボストン・ミュージック・アワードのインディ・アルバム・オブ・ジ・イヤーに選ばれ大絶賛を浴びる。またローリング・ストーン誌においても圧倒的な支持を得、現在発売中の2枚目のアルバム「キューア・フォー・ペイン」も話題となっている。本国アメリカよりもイギリスやフランスなどヨーロッパで先に人気に火がついたという事実からも察するとおり、彼らの音はとにかく異質だ。オルターナティブ・ロックやジャズなど、決して一言でカテゴライズできない魅力を秘めている。巷では“知的に洗練されたグランジ”などとも形容されているらしいが、どう表現してよいか困っているうちに結局はどう表現しようが関係ないと気づくのだ。とりえず今回の来日公演で体験してみることをお勧めしたい。日程は下記の通り。



来日記念盤
9月24日発売デビュー・アルバム
「グッド」
2,500円(税込)



発売中
セカンドアルバム
「キューア・フォー・ペイン」
2,500円(税込)



頭に効く、音楽のモルヒネ。

?

MORPHINE

●モーフィーン
日程・10月4日(火)
場所・心斎橋クラブクアトロ
時間・開場18:00 開演19:00
前売・5500円(1 DRINK付)

問・スマッシュウエスト
06・361・0313
心斎橋クラブクアトロ
06・281・8181

知りすぎた少年の行方。J・グリシャム作・ヒット小説の映画化、第三弾。

依頼人／ザ・クライアント

『ザ・ファーム／法律事務所』「ベリカン文書」の原作者ジョン・グリシャムの新作「依頼人」が出版され、またまた売れている。前2作の映画化に成功したハリウッドがこれを見逃すはずはない。「フォーリング・ダウン」のジョエル・シュマッカー監督が乗り出した。見知らぬ男が自殺しようとしているのを目撃した少年。男は少年にある秘密を打ち明ける。それはマフィアに殺害された上院議員の遺体の隠し場所だった。秘密を知った少年は以来何者かに命を狙われるハメに。そんな彼が助けを求めたのは、暗い過去を持つ女弁護士だった。出演にスーザン・サランドン、トミー・リー・ジョーンズ。注目はこれがデビュー作の少年役ブラッド・レンフロ。11才にしてこの思慮深気な表情とセックスアピールは、まさに買い。カルキン坊やとはエライ違いだ。リバー、ディカプリオに続く憂いの実力派となるか？先が楽しみである。

●10月8日より公開



大ヒットなるや否や!?エディ・マーフィーお久しぶりの超当たり役第三段!!

一作目

の大ヒットが今から10年前、と言えば意外に昔な気もするのだが。とにかく87年のパート2に続き、アクセル・フォードがまたもやスクリーンに登場する。演じるのはもちろん、これが超当たり役のエディ・マーフィー。お得意のマシンガン・トークに、一度事件に首を突っ込んだら後には引けない厄介な性格も以前のまま、今回は誰をもおとぎの国に誘う大遊園地ワンダーワールドを舞台に活躍する。今後の彼の役者生命がかかっているともいわれる本作だけあって、願ふれも本作常連の話のわかる同僚役ジャック・ラインホルドはもちろん、ジョージ・ルーカス、ジョー・ダンテなどのメジャーどころ監督陣がちょい役で顔を出すなどサービス満点な上、スリリングなアクション・シーンもふんだん、かける意気込みは充分。ただ感想はというと、これが一作目ならもっとすんなり満足できたのかも、という感じ。前作より以上のものを求められてしまう連作ものの難しさが若干出てしまったのが少々残念。



●9月下旬公開

キカ

ゴージャス、そしてエキセントリック。ペドロ・アルモバルの最新作に大満足。

『バチ』あたり修道院の最期』『神経衰弱ざりざりの女たち』『アタメ』『ハイヒール』と次々に強烈な作品を手がけるペドロ・アルモバル最新作「キカ」。お馴染みの斬新な色彩と、まともな人間はおらんのかと思わず言いたくなる登場人物のエキセントリックさが今回もふんだんで嬉しい限り。純粋で無邪気な女キカは、年下のカメラマン、ラモンと同棲しながらラモンの義父にあたる放浪作家ニコラスとも関係を持つ発度家。そこにラモンの元恋人アンドレアやレスピアのメイド、ファナなどが入り乱れ大騒ぎ。皆が自分のことしか考えていないこの可笑しさ。ラテンのひとってホントにタフなのだ。特にアルモバル作品の常連で、ジョージ・マイケルのプロモビデオからゴルチェのモデルまで引っ張りだこのロッシ・デ・バルマの存在感は相変わらず強烈。また、この作品の衣装もゴルチェが担当しているのに注目されたし。

●9月24日より公開



パルプ・フィクション

今年のカンヌで大旋風を巻きおこした、恐いものなしタランティーノの自伝作。

今一番旬の監督といえはこのひと、クエンティン・タランティーノだろう。自らも役者だったが、世間の注目を浴びたのは彼が脚本を書くようになってからだった。その後出す作品すべてヒット、94年のカンヌ国際映画祭グランプリもかささらった。今回の「パルプ・フィクション」がそれ。パルプとは30年代のアメリカで流行った安っぽい犯罪小説のこと。ストーリーはそんな3つの物語が交錯し、やがて大きなクライマックスへとなだれこんでゆくという彼お得意のスピード・アクションだ。出演にジョン・トラボルタ、ブルース・ウィリス、ユマ・サーマン、ロザナ・アークエットを始め「レザボア・ドッグス」のハーヴェイ・カイテル、ティム・ロス、「トゥルー・ロマンス」のクリストファー・ウォーケン、「キリング・ゾーイ」のエリック・ストルツなど、今やタランティーノ・ファミリーともいえる豪華なキャストも見逃せない。

●10月8日より公開



男が女を愛する時

男の献身。新しい愛のかたちを描きリアルに胸に迫るラブ・ストーリー。

ここまですぐに優しい男が本当にいるだろうか。と思わずにはいられない現代のホットなラブ・ストーリーだ。出会ってすぐ激しい恋に落ちたハンサムなパイロット、マイケルとキャリア・ウーマンのアリス。結婚して幸せに暮らしていたかのように見えたある日、マイケルは初めてアリスの秘密を知る。花形職業とはいえ留守がちな夫には言えず孤独に震えてきた妻。それを知ったマイケルは、どんなことをしてもアリスを救おうと決意する。それからの男の尽くしぶりは、女性の地位が向上したとはいえまだまだ男社会の日本の女性にとっては、想像もしがたいほど。だがそれが「所詮お話」で片付けられない程のリアリティをもって胸に迫るのは、「ほくの美しい人だから」などで実力は実証済みの監督ルイス・マンドーキの力量か。感情のディティールを丁寧に描いて泣かせてくれる。マイケルにアンディ・ガルシア、アリスにメグ・ライアンのキャスティングもすっかりはまっていたナイス。

●公開中



ポジティブな未来の宇宙を描いた21世紀のポップ・ミュージック。

耳に心 地よい響きを残すポップス・バンド、ナイス・ミュージック。彼ら自身による選曲（80年代UKニューウェイヴから60年代ポップス、サントラ、当然90年代の先端音楽まで）がこれまたナイスなアルバム・ステーション（土曜日25:00~26:00）でレギュラー・エアパートナーを務める佐藤清喜と清水雄史の2人。そんな彼らの趣味の良さが反映したジャイアント・シングル「アストロネイチャー」が7月に発売。同時にアナログでもリリースされたこの作品は、10月にリリース予定の3rdアルバムへの架け橋とも言えるだろう。

— 「アストロネイチャー」は、時期的に向井千秋さんが宇宙に行くのを見ながらレコーディングされたとか。

清水「そうですね、冷や冷やしながら見てたんです。無事に飛んでくれないと“スペースシップ・コース・オン”なんて歌ってる場合じゃないって（笑）チャレンジみたいなことになったら発売禁止ですからね」

佐藤「幻の、とか言われて（笑）」

— ナイス・ミュージックには、宇宙への思い入れみたいなものが1stの頃からあったと思うんですけど。

佐藤「ありますね。子供の頃の単純な未来感とかロマン的な部分で、そのまま空とか宇宙に繋がってたと思うんですよ。自分の中では自然に宇宙のイメージがありますね」

清水「もともとナイス・ミュージックを始める時に21世紀のポップ・ミュージックを作りたい、という漠然としたコンセプトがあったんですよ。21世紀と言ってもあと10年もないですけど。10月に出る3rd作る時に初心に、最初に思ってたところに帰ろう、と二人共思ってた。で「タイムカプセル」とか「星と僕等はつながっている」（3rd収録予定）のようなものが生まれて、そういう思いを描いた内容のコンセプト・アルバムになってます。でこの「アストロネイチャー」では3rdの予告編的なアルバムなんです」

— ジャイアントシングルの中には「天気雨」のリミックスがあったり、1st、2nd然り3rdにも、宇宙に限らず、天気ものも多いですよ。この台風の多い時期というのも正にナイス・ミュージックにピッタリ。そもそも天気

に左右されやすい？

佐藤「されやすいですね、かなり。その分だけ気持ちの良い天気をイメージの中では見ていたいというのがあって」

清水「環境って大事ですよ、やっぱり。朝起きて曇りだったりした日にゃもう憂鬱ですね（笑）あ、「天気雨」のアレンジも憂鬱ですよ」

— グニャグニャしてますよね。

佐藤「リミックスしたダブ・マスターXさんには「天気雨」はそういうイメージだったんじゃないですか（笑）」

— シングル集はCDとアナログでリリースされていますが、この2枚は収録曲のヴァージョンが違いますよね。

佐藤「どうせならいろんなヴァージョンを聞かせたいっていうのがあって」

— 話は戻りますが、94年型の未来と言うよりは、レトロというか、人類が初めて宇宙に行った頃の未来感に近い感じがありますよね。

清水「単なる懐古主義じゃなくて、その当時の未来のイメージって、今で言うブレッドランナー的な未来感とは違いますよね」

佐藤「わりとブレッドランナー的な未来感にうんざりしてたんですよ。3rdのコンセプトを考えてる時にふと、昔思ってた未来ってもっとポジティブだったよなっていう気がして。映画に限らずニュースにしても開発ものとか、ポジティブなネタは全然聞かないじゃないですか。昔だったら道路一つ出来るにしてもスペース・シャトルが飛ぶにしても子供の頃の方がもっと夢があったし。単純にガキだったからそう思ってたかもしれないですけど、宇宙に対するロマンみたいなものがだんだん消えてきて、そういう風潮ってなんか違うんじゃないかって気がしてきて。それと、ナイス・ミュージックが最初やろうとしてきたことと段々だぶってきて。これくらい世紀末になると世紀末を煽るような遺棄を騒ぐ人達はいっぱい出てくるだろうから、それじゃナイス・ミュージックは世紀末を飛び越えて、21世紀に降り立って音楽を始めに行こうって感じだったんですよ」

— ブレッドランナー的な未来はナイス・ミュージックの歌う範疇じゃないと判断したってこと？

佐藤「僕の見たい未来はブレッドランナーじゃないってことですね」

清水「最初にアメリカが宇宙に降



り立った時にあった宇宙に対するロマンってもう日本には全然なかったでしょう？技術的にはアメリカともロシアとも変わらないわけですから、最初に持ってた宇宙に対するロマンをまた見つめ直さなきゃいけないんじゃないかって感じじゃないんですか」

— で、向井さんはイモリとメダカを宇宙に持って行きましたが、ナイス・ミュージックはやっぱりカメラとビデオとテレコですね（笑）

佐藤「そうですね。あんまり重くないものもいいですね。でもBGMは欲しいですね」

清水「アポロは映画「2001年宇宙の旅」のサントラを聞きながら宇宙へ行ったそうですよ。でもやっぱりナイス・ミュージック持っていけないと（笑）」

佐藤「言うと思った」

取材・文／早川加奈子
協力／ビクターエンタテインメント、
タワーレコード京都、
アルファ・ステーション



「アストロネイチャー」
ナイス・ミュージック/1,200円（税込）
／ビクターエンタテインメント

INTERVIEW
nice music

CATCH the NEW!

L⇔R INTERVIEW

男らしいL⇔Rのサンドウィッチなアプローチ!

'60~'90Sプリティッシュ・ビート〜アメリカン・ポップスの、切なく軽快なセンスを匂わすポップ・エッセンスとスケール感あふれたサウンドが定評あるL⇔R。女性Voの脱退、レコード会社移籍を期に、初期形態である黒沢健一、黒沢秀樹、木下裕晴の3人に戻ったL⇔R。新たに広い場所へとはばたくステップ的シングル「リメンバー」が7月に、10月21日にはシングル「ハロー・イツ・ミー」と、5枚目のアルバム(タイトル未定)が同時リリースの予定。今回は作家として多くのシンガーへ楽曲提供もしているVo&ギターの黒沢健一(森高千里「気分爽快」など、ギター&コーラスの黒沢秀樹の黒沢兄弟にインタビュー。

— 表情のかなり違うシングル「リメンバー」と「ハロー・イツ・ミー」の2枚を聞いて新しいアルバムを推測するって形がいいんでしょうか?

黒沢健一(以下K)「ええ、この2曲が核になっているというか。サンドウィッチみたいに「リメンバー」が上のパンだとしたら「ハロー〜」が下のパンで、その間に

詰まってる具がアルバムの中に入ってる、それで一つのサンドウィッチとして食べて頂きたいなど」
— 具の方が情報量多そうですね(笑)

K「(笑)今までのL⇔Rってもしかしたら具だけだったのかもしれないという反省もありまして、今回はちゃんとパンも届けようかと」

— パンてのは、つまりもっとわかりやすく、大勢の人に向けて扉を開いたという意味、と?

K「そうですね。例えばトマトとか…何か食べ物のお話ばかりだな(笑) トマトとかチーズだけが並んでも何の関連性もないけど、パンがあることでサンドウィッチという形態になるという(笑)」

— 11月には全国ツアーが始まりますね。11月1日(火)には大阪のサンケイホールでライブがありますが。

K「今までL⇔RはライブとCDのギャップがあると言われていて、CD聞いただけだとライブが想像つかないらしいんですが、実際見に来て頂くと、CDと違ったところで非常に気に入って下さる方が多くって。もしラジオなんかで「リメンバー」を耳にしただけなんだけどっておっしゃる方でも、ライブに来て頂いたらきっと気に入って頂けるはず、ということ強調したいですね」

— 「リメンバー」のB面「夜を撃ち抜こう」は始めて以来のハードロック・ナンバーだそうです。

黒沢秀樹(以下H)「それは、ただギターが重なるだけなんですけど(笑)でもバンド・サウンドですよ」

— ライブのノリみたいなものがこの曲から感じられますよね。

K「なかなかライブが想像つかないらしいので、今回ライブ的なものを作りたくて、それでB面にこの曲を入れてみたんです」

— これまではL⇔Rサウンドってどうしてもポップ・マニアな面を意識せざるを得ないとありましたけど、この「リメンバー」からそれがきちんと消化されていると言うか、さっきの言葉で言うとパンになって来たなという感じがありますが、意識的な変化が?

K「今回新しいスタッフに変わって、レコーディングしたわけですが、“これってL⇔Rらしいよね”とか“L⇔Rのカラーが出てるよね”って言われる機会が非常に多くて、自分達ではポップ・マニア

ってことはそんなに意識してなくて、ただ自分達らしい音楽を作ろうということでごんばって来て。今回移籍して新しいスタッフに変わって、それでも“L⇔Rらしい”という風と言われて、“もうこだわらなくても既に自分達らしいものがあるんだ”という自信がかなりついた。何のギミックもなく曲や詞にしていけばいいんだ、と言う一つの答えがこの曲に出ているんじゃないかと思うんです」

— ところで「ハロー・イツ・ミー」のB面「ハイパー・ベリー・ダンス」はインストだし、随分大胆な曲ですよな。

K「これはアルバムに入らないです。このB面は聞くな、というのがコンセプトなんです(笑)」

— でもCDだし聞いちゃいますよ〜。

H「そこが穴だったという(笑)今はレコードの時代じゃなかったということですっかり忘れていたんですよ(笑)」

K「B面に比較的地味な曲を入れてっていう風にするよりも、どうせなら聞かない為のB面。これは今だかつて日本のレコード市場になかったんじゃないかっていうのが一つコンセプトにあって、「ハロー〜」は皆んなきくと気に入ってくれると思うから、ここで止める人もかなりいることを期待して」

H「B面は中途半端なものなんかじゃなく、ちゃんとB面を追求しろ、というこだわりがありまして(笑)聞く奴も覚悟して聞け、と(笑)でも、B面好きの人間って何かたまらないものがありますよね」

— (一同爆笑)でも結構B面好きでしょ?

H「好きですよ(笑)」
— わたしも好きです。特にこのB面は。

H「受けがいいな。このB面(笑)やっぱりコンセプトを明確に持つと人に伝わるんですよ(笑)。地味な曲をB面に、という考え方こそひねくれてますよね。で、ひねくれない形でB面、と言うところになってしまったんですよ」

— 何だか男らしいですね。男ばかりに戻って、全く男らしいですよな!

H「そ〜なんですよ(笑)」

取材・文/早川加奈子
協力/種、ポニー・キャニオン、
キョードー大阪

